

古瀬奈津子編

『広開土王碑拓本の新研究』

同成社 二〇一三・七刊

A5 一三四頁 四五〇〇円

本書は、二〇一二年七月七日にお茶の水女子大学で開催された「発見！お茶の水女子大学の広開土王碑拓本」での講演をもとに、広開土王碑拓本の最新研究に関する論考を収載したものである。

第I部では、広開土王碑文の内容を論じた武田幸男論文、李超瓊の『遼左日記』を手がかりに初期の墨本制作過程を論じた徐建新論文、拓本を構成する小拓紙にもとづき拓本の編年を示す早乙女雅博論文、お茶の水女子大本が一九三九年に購入されたと推定する奥田環論文、山形大本の将来の由来を説く三上喜孝論文、金光教図書館本が「水谷旧蔵精拓本」であることを解明した稲田奈津子論文が収載される。

第II部では、小拓紙の構成から、お茶の水女子大本が九州大学図書館本とほぼ同時期に製作されたと指摘する早乙女雅博・橋本繁論文、着墨状況や拓出文字などから、お茶の水女子大本が、一九二五年前後に作製されたと推定する武田幸男論文、各種拓本との碑字の比較から、お茶の水女子大本の作製時期を一九二〇年代後期と推測する徐建新論文が収載され、最後に、本書のねらいを簡潔に述べた三上喜孝氏の総括が収録されている。

以上が本書の概略である。近年、広開土王碑研究は以前と比べ

低調であった。こうした状況下にあつて、多数の研究者が参画し、本書が編まれたことをまずは喜びたい。

その上で、本書の紹介で忘れてはならないのが、第一に、広開土王碑拓本についての研究成果が簡潔かつわかりやすく叙述されていることである。広開土王碑拓本の拓出時期・性格把握は困難かつ難解で、それゆえ専門的な知識が求められ、専門的な叙述になりがちである。だが、本書ではそれらの研究成果がコンパクトにまとめられており、広開土王碑拓本研究にこれから着手しようとする方にも至便なものとなっている。

とはいうものの、既往の研究をふまえた最新の研究成果も随所に示されている。特に、徐建新氏の新出史料『遼左日記』にもとづく研究は、初期墨本作成過程を解明する上で重要で、研究に裨益するところ大である。こうした最新の研究が提示されていることが、本書の第二の特徴として指摘できよう。

第三は、近代日本のアジア認識をも射程に入れた広開土王碑拓本研究の重要性を高唱していることである。石灰拓本の作製時期などについては、これまで多くの研究者の指摘するところであるが、日本への将来過程とその意義を論じたものはあまりなかったようにおもわれる。拓本の将来は近代日本の朝鮮・「満州」観とも分ちがたく結びついており、その同時代的意義の追及は、近代日本における広開土王碑の意味、それにもとづく近代日本の朝鮮・「満州」観を理解する上でも重要である。近年、近代日本のアジア認識・アジア史研究への批判的検証が盛んであるが、拓本受容もこうした課題を解明する手がかりの一つとなろう。そうした

意味においても、本書が、広開土王碑研究だけでなく、それら研究進展の契機となることを期待したい。

(井上直樹)